

## 過去 10 年間の豚丹毒の発生状況

豊橋市食肉衛生検査所 ○森本賢治 高木慎介 松本圭 山口貴宏  
山内俊平 細井美博

### はじめに

豚丹毒は、豚丹毒菌 (*Erysipelothrix rhusiopathiae*) の感染により起こる疾病で、急性型である敗血症型及び蕁麻疹型、慢性型である関節炎型及び心内膜炎型の四つの病型に分けられる<sup>1)</sup>。本菌は豚以外にも種々の動物に感染し、人獣共通感染症として公衆衛生上重要な疾病である。

平成 24 年度、管内と畜場において、豚丹毒の発生数が増加したため、原因を探るとともに、過去 10 年間の発生状況を分析したところ、若干の知見を得たので報告する。

### 材料及び方法

平成 15 年 4 月から平成 25 年 3 月までに管内と畜場に搬入された豚 2,106,173 頭のうち豚丹毒で廃棄した 185 頭について、年度別、月別及び農場別並びにそれぞれの病型別発生状況について分析した。

### 成績

豚丹毒の発生数は平成 24 年度が最も多く 32 頭、平成 16～18 年度及び 21 年度が最も少なく各年度 14 頭であった (図 1)。病型別発生状況は、関節炎型が 111 頭 (60%)、蕁麻疹型が 45 頭 (24.3%)、心内膜炎型が 29 頭 (15.7%) であった。年度別の推移では、関節炎型は平成 17 年度の 9 頭から徐々に増加し、平成 20 年度の 20 頭をピークに減少するが、平成 22 年度から再度増加していた。蕁麻疹型は平成 20 年度には発生がなかったが、翌 21 年度から年々増加しており、平成 24 年度は最も多く 14 頭であった。心内膜炎型はばらつきが大きく、最大が平成 22 年度、24 年度の各 6 頭、最小が平成 21 年度の 0 頭であった。

月別発生状況は、2 月、3 月、5 月の順に多く、この 3 ヶ月で 84 頭 (45.4%) 発生しており、8 月が最も少なかった (図 2)。病型別の推移では、関節炎型は各月により発生数が大きく異なり、最も多いのが 5 月の 19 頭、最も少ないのが 8 月の 1 頭であった。心内膜炎型は各月に 1～4 頭発生していた。蕁麻疹型は 2 月、3 月に多く、この 2 ヶ月で 25 頭発生しており、蕁麻疹型 45 頭のうち 55.6% を占めていた。

豚丹毒の発生した農場 64 農場のうち、上位 10 農場で 95 頭 (51.4%) 発生し、再発する農場が多かった (表 1)。上位 10 農場を除いては、各農場 4 頭以下の発生を認めた。

10 農場の病型別発生状況は、F 及び I 農場以外の 8 農場は関節炎型が最も多かった。同じ慢性型である心内膜炎型はどの農場も 2 頭以下であった。蕁麻疹型は A 及び F 農場で多く、2 農場で 13 頭発生していた (表 2)。

## 考察

平成 24 年度、豚丹毒が増加した原因は、特定の農場で関節炎型と蕁麻疹型が集団発生したためと考えられ、C 農場では関節炎型が、F 農場では蕁麻疹型が多発していた。農場への聞き取り調査の結果、どちらの農場も母豚にワクチンを毎年接種していた。C 農場で集団発生した原因の特定には至らなかったが、F 農場では、生産者が不慣れな担当者に替わり、出荷時に蕁麻疹を見落としたためであった。蕁麻疹型は発熱や食欲不振などの症状に加えて、感染 1～2 日後に菱形疹と呼ばれる特徴的な皮膚病変を示すため、生産者が発見することは比較的容易であり、かつ治療が可能である。そのため、F 農場に対し蕁麻疹型豚丹毒の説明と豚丹毒に関するリーフレットを交付したところ、その後 F 農場において蕁麻疹型は発生していない。

関節炎型は冬から初春に多く、夏に少なかったという報告があり<sup>2)</sup>、管内と畜場では、関節炎型および蕁麻疹型が冬から春にかけて発生が増加していた。したがって、冬季前に注意喚起を行うことで豚丹毒の予防につながる可能性が考えられる。また、I 農場を除く全ての農場で 10 年間継続して母豚にワクチンを接種していたため、豚丹毒が再発する要因として、畜舎等の飼養環境で豚丹毒菌が常在化している可能性が示唆された。今後も生産現場での衛生管理の一助となるよう、検査結果を効果的にフィードバックするとともに、豚丹毒の予防を啓発し、安全で衛生的な食肉を供給していきたい。

## 引用文献

- 1) 辻本元ら：獣医内科学 大動物編, 文永堂出版株式会社, 236 (2005)
- 2) 青山雅弘：と畜検査から見た豚丹毒の発生動向と問題点, 豚病会報 28, 18-21 (1996)

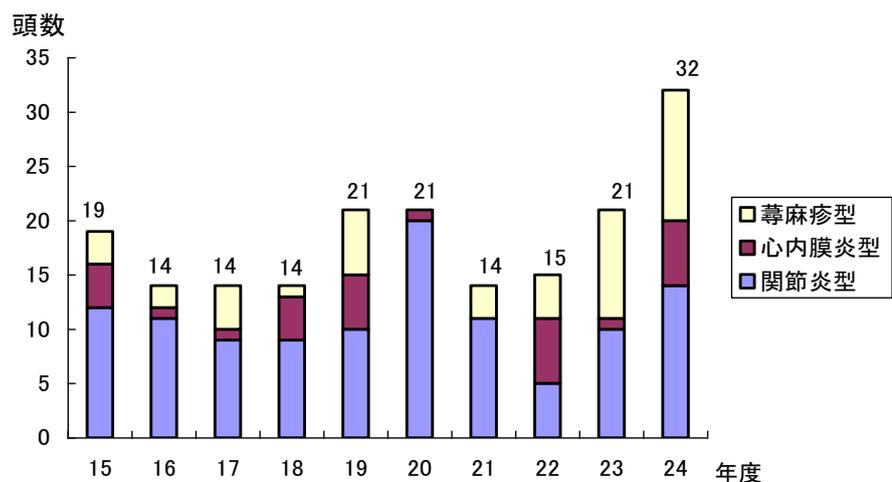
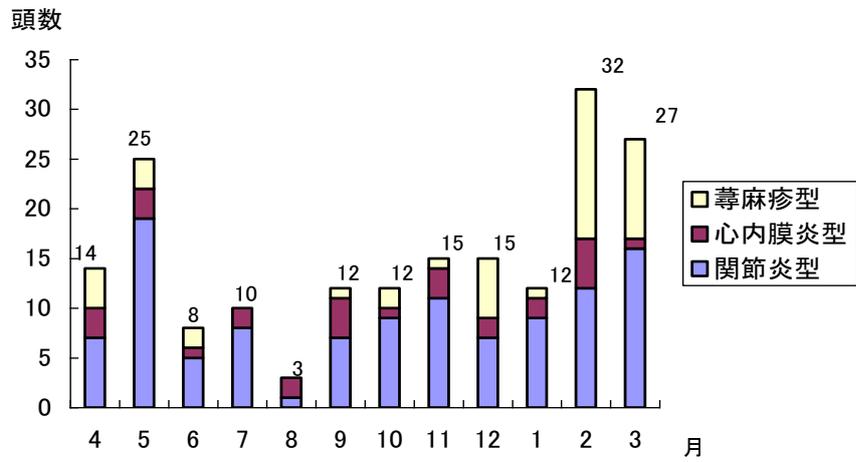


図 1 年度別及び病型別発生状況



| 年度 | 農場 |    |                 |   |   |                 |   |   |   |   |
|----|----|----|-----------------|---|---|-----------------|---|---|---|---|
|    | A  | B  | C               | D | E | F               | G | H | I | J |
| 15 | -  | -  | 1               | 3 | - | -               | - | 4 | - | - |
| 16 | -  | -  | -               | - | - | -               | 2 | - | 1 | 1 |
| 17 | 4  | -  | -               | - | - | -               | 2 | - | - | - |
| 18 | 5  | -  | -               | - | - | -               | - | 1 | 1 | - |
| 19 | 2  | 4  | -               | 1 | 3 | -               | 1 | 1 | 1 | 2 |
| 20 | -  | 7  | -               | - | 6 | -               | - | - | - | 2 |
| 21 | 1  | -  | -               | 5 | - | -               | - | - | - | - |
| 22 | 5  | -  | -               | - | - | -               | 2 | - | 2 | - |
| 23 | 5  | -  | -               | - | - | 2               | 1 | 1 | 1 | - |
| 24 | -  | -  | 9 <sup>*1</sup> | - | - | 6 <sup>*2</sup> | - | - | - | - |
| 計  | 22 | 11 | 10              | 9 | 9 | 8               | 8 | 7 | 6 | 5 |

表2 病型別及び農場別発生状況 (10 農場)